

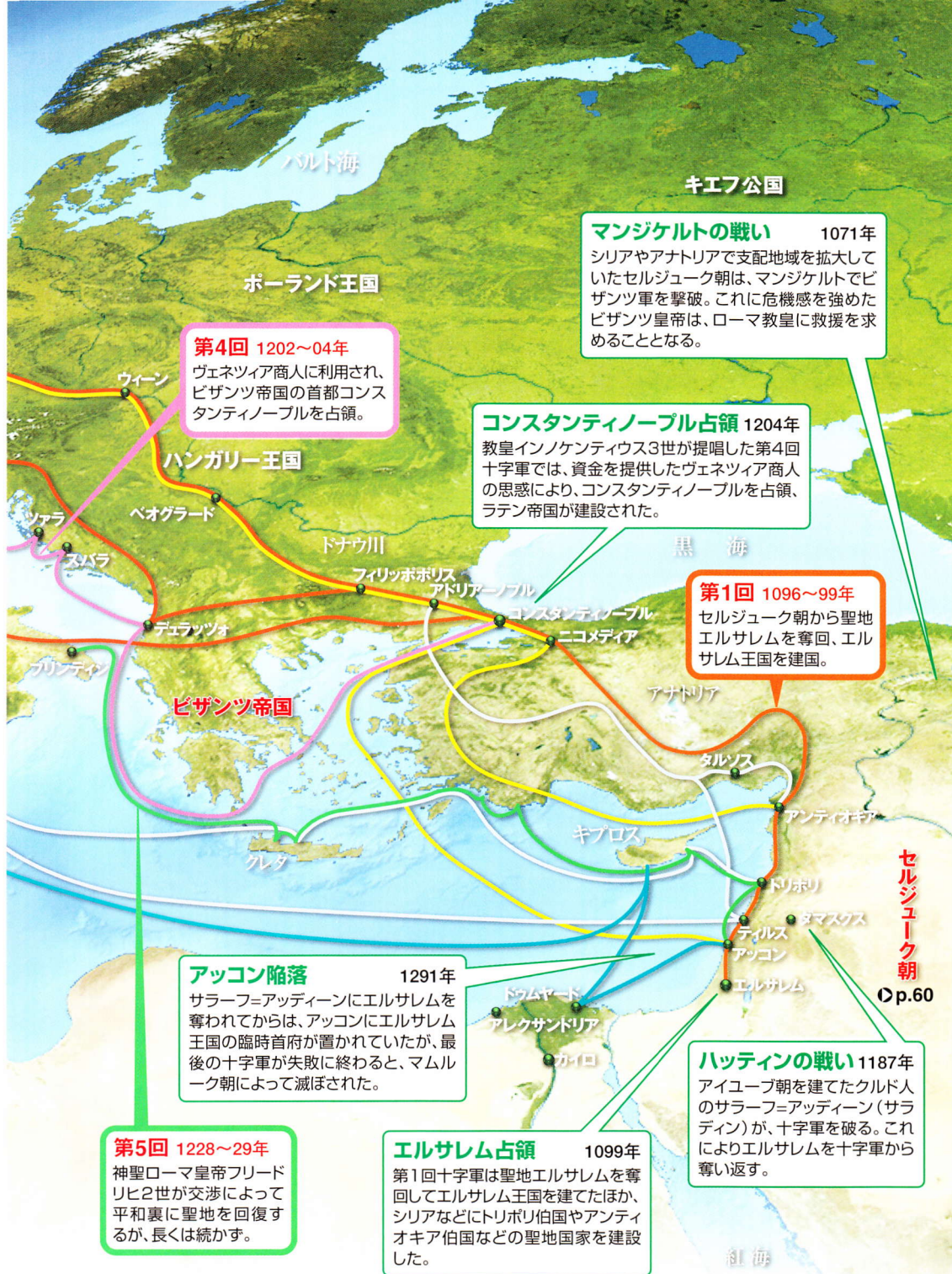
十字軍の遠征で 拡大した西欧社会



1096年
1291年

人口増加などによる西欧社会の拡大を背景とした十字軍は、単なる軍事遠征にとどまらず、東西文化の接触や西欧社会の变革を促すきっかけとなる出来事であった。

セルジューク朝
▷p.60



マンジケルトの戦い 1071年
シリアやアナトリアで支配地域を拡大していたセルジューク朝は、マンジケルトでビザンツ軍を撃破。これに危機感を強めたビザンツ皇帝は、ローマ教皇に救援を求めることとなる。

コンスタンティノープル占領 1204年
教皇インノケンティウス3世が提唱した第4回十字軍では、資金を提供したヴェネツィア商人の思惑により、コンスタンティノープルを占領、ラテン帝国が建設された。

第1回 1096～99年
セルジューク朝から聖地エルサレムを奪回、エルサレム王国を建国。

第4回 1202～04年
ヴェネツィア商人に利用され、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルを占領。

アッコ陥落 1291年
サラフ=アッディーンにエルサレムを奪われてからは、アッコにエルサレム王国の臨時首府が置かれていたが、最後の十字軍が失敗に終わると、マムルーク朝によって滅ぼされた。

ハッティンの戦い 1187年
アイユーブ朝を建てたクルド人のサラフ=アッディーン(サラディン)が、十字軍を破る。これによりエルサレムを十字軍から奪い返す。

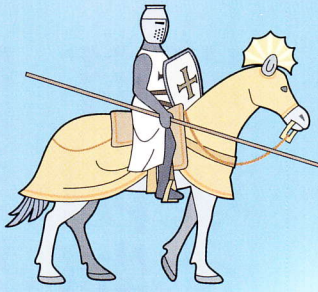
エルサレム占領 1099年
第1回十字軍は聖地エルサレムを奪回してエルサレム王国を建てたほか、シリアなどにトリポリ伯国やアンティオキア伯国などの聖地国家を建設した。

第5回 1228～29年
神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世が交渉によって平和裏に聖地を回復するが、長くは続かず。

さまざまな背景と思惑がからんだ十字軍遠征

11世紀ごろの西欧世界は、農業生産力の向上により人口が増加し、それにとまない商業も発達しはじめた。また、さらに聖地巡礼が行われるようになった。しかし、東方の聖地エルサレムはイスラーム教の聖地でもあり、当時はセルジューク朝(P60参照)が支配していた。そのセルジューク朝がアナトリアに進出すると、脅威を感じたビザンツ皇帝はローマ教皇ウルバヌス2世に救援を求めた。これを受けた教皇は1095年、クレルモン公会議を開いて十字軍遠征を提唱。この呼びかけに応じた諸侯や騎士たちからなる第1回十字軍が翌96年に出発し、以後約2世紀にわたる十字軍遠征が始まった。聖地奪還という大義の下に集まった十字軍だが、東西両教会統一を目ざす教皇や、武勲や戦利品を狙った諸侯や騎士、商業権拡大をもくろむ商人など、当初から関係者の思惑はさまざまであった。

第1回十字軍は1099年に聖地奪還を遂げ、エルサレム王国を建設した。しかし、その後イスラーム教徒たちが勢力を盛り返してきたため、第2回十字軍が遠征を行うが失敗。また、アイユーブ朝のサラフ=アッディーン(サラディン)によってエルサレムが奪われると三たび十字



十字軍の騎士

テンブル騎士団の十字
 テンブル騎士団は、十字軍がつくったエルサレム王国などの聖地国家で巡礼者の警護にあたった騎士団。現金の輸送や銀行なども行ったため、その財力に目をつけたフランス王フィリップ4世によって解散させられた。

第2回 1147～49年
 フランス王ルイ7世、神聖ローマ皇帝コンラート3世が参加。内部対立で失敗。

クレルモンの公会議 1095年
 教皇ウルバヌス2世が招集した会議で、教会改革の推進を確認。会議に先立って教皇は、聴衆に向けた演説でエルサレム奪還の必要性を説き、熱狂的な支持を得た。

第3回 1189～92年
 神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世(赤ひげ王)、フランス王フィリップ2世(尊厳王)、イギリス王リチャード1世(獅子心王)らが参加。

第7回 1270年
 チュニスに侵攻したが、フランス王ルイ9世が病没したため中止。

第6回 1248～54年
 教皇の信任厚いフランス王ルイ9世がエジプトに侵攻するも失敗。

ノルマンのシチリア
 12世紀にノルマンディー公国の騎士たちが建国したシチリア王国では、ヨーロッパとイスラームが融合した高度な文化が開花した。神聖ローマ皇帝も兼ねた王フリードリヒ2世は、宗教的寛容と高い学識の持ち主で、第5回十字軍でイスラーム教徒との交渉によって聖地を回復させた。

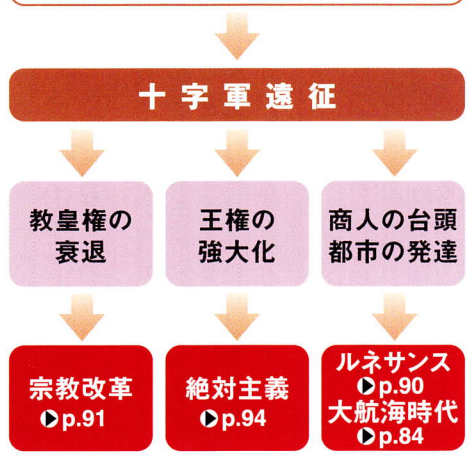
大西洋

地中海

十字軍の目的と影響

十字軍に参加したそれぞれの目的

- 教皇** 東西両教会の統一で主導権を握る
- 国王・諸侯・騎士** 武勲や戦利品、新たな領地の獲得
- 商人** 東方への商業圏拡大
- 民衆** 贖罪や債務の帳消し



NASA's Earth Observatory

十字軍の失敗と中世封建社会の動揺

この第3回を頂点に、その後の十字軍は劣勢に転じた。とくに第4回十字軍はヴェネツィア商人に利用され、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルを占領してラテン帝国を建てるなど、当初の目的から逸脱した。その後も第5回十字軍で一時聖地を回復したものの長続きせず、1291年にアッコが陥落し、十字軍は結局失敗に終わった。

十字軍の失敗により、教皇の権威が失墜したほか、参加した諸侯や騎士の多くが没落し、中世封建社会を揺るがすきっかけとなった。一方、兵士の輸送などを行ったイタリアの港湾諸都市の商人たちは、その後、地中海を経由した東方交易を独占するようになった。

軍が招集された。この第3回十字軍ではイギリス王リチャード1世(獅子心王)がサラールアッディーンと講和し、巡礼者の安全だけは確保された。